



サ ラ ナ



No.20 長寿寺報 令和2年7月

いつまでも同じ場所には留まらない

様々な人と会話していると、「自分は〇〇な人だから。」と耳にすることがたまにあります。発言の意図は分かりませんが、私には、「自分はこれ以上、成長する気はありません。変わる気はありません。」と周囲の人々に予防線を張っているように聞こえてしまいます。人は変わる事のできる生き物なので、そのような発言や心構えは非常に勿体ないように思えます。

仏教では、変わる事のない性のようなものがあるとは考えていません。長きにわたって癖が染み付き、あたかも生まれつきの「性」のようになってしまうことを「習い性」と言いますが、そのように私たちそれぞれの今日の在り様は環境などの様々な原因と条件の積み重ねにより作り出されたものに過ぎないと考えるのです。例えば、手癖が悪い人が居たとしても、それは癖という言葉が示すように生まれつきではなく、明らかに後天的なものです。生まれつき手癖の悪い赤ん坊など見た事はありませんよね。純粹無垢な赤ん坊もそのように変わるわけですから、本人に意欲があれば良い方向にも必ず変わる事ができます。そして、変わる事に年齢は関係ありません。

禅宗の修行で用いられる禅問答を、「公案」と呼びます。公案の多くは、中国唐代に活躍した先達らのやり取りが基になっており、その中でも、趙州從諗(778-897)というお坊さんが弟子たちと交わした問答の多くは公案として今日まで遺されています。私も最初に与えられた公案は、「趙州狗子」といって、修行僧が趙州和尚に犬に仏の心があるか否かを問うた問答でした。我々、禅宗の中ではスーパースターといっている趙州和尚ですが、どうも最初から抜きこんでいたわけではなさそうで、若い時のエピソードはあまり伝えられていません。ほとんどが晩年のものばかりなのです。和尚は若くして出家した後、一廉の僧侶となったのですが、六十歳のときに発心して修行をやり直し、二十年にわたる行脚の旅の後に、大成しました。つまり、晩年の働きが趙州和尚をスーパースターに

押し上げているのです。歳を重ねてから人に教えを請うたり、学び直すことが簡単でないことは私のような若輩にも分かります。しかし、和尚は、「七歳の童児なりとも、我に勝るものには我れ則ち問わん、百歳の老翁なりとも我に及ばざる者には我れ則ち侘を教えん」と言われ、その言葉や生き方は我が国の文豪、夏目漱石の晩年にも大きな影響を与えました。大正五年の元日に朝日新聞に掲載された「點頭録」という文章で、漱石は趙州和尚のことを紹介し、次のように記しています。「自分は多病だけれども、趙州の初発心の時よりもまだ十年も若い。たとい百二十まで生きないにしても、力の続く間、努力すればまだ少しは何か出来る様に思う。」また、同年の逝去前月には、知人の修行僧に宛てた手紙の中で、「気がついて見るとすべて至らぬ事ばかりです。～中略～この次御目にかかる時にはもう少し偉い人間になりたいと思います。」と心情を綴っています。漱石が趙州和尚から叱咤され、最後まで人として、「より良く」なろうとしていたことが伺えます。このように、より良くなるという気持ちはいつまでも大切に持ち続けなければならないものなのでしょう。

お釈迦様の言葉にも、次のようなものがあります。

「学ぶことの少ない者は、牛のように老いていく。肉ばかり増えて、智慧は増えない。」

ダンマパダ(法句経)

昨日よりも今日、今日よりも明日と努力を続けなければ、同じところで死ぬまで草を食べている牛と同じじゃないか、とお釈迦様は仰っているのです。辛辣な言葉ですが、的を射ているように思います。禅の言葉にも、「百尺竿頭一步を進む」とありますが、いつまでも同じ場所に安住しては、優れたはたらきをすることはできないもので、ここで限界だと思っても、敢えて一步を踏み出すことが大切であります。私自身、決して大した人物ではありませんが、それでも人生の続く限り、一步でも前に足を進めたいと思っています。また、この文章を通じて一人でも多くの方が同じように歩みを進めてくれたら嬉しいことです。

編集後記

三年ほど前に植えた沙羅双樹が初めて開花しました。諦めかけていただけに非常に嬉しいことでした。沙羅双樹は仏画にも描かれることが多く、菩提樹・無憂樹と並んで、「仏教三大聖樹」の一つに数えられます。しかし、日本の天候には沙羅双樹は合わないため、古来より日本では夏椿を沙羅双樹と呼んでいます。ご参拝の際には、どこに植えられているか探してみてください。



和尚が読み解く

釈迦の生

～prologue～



はじめに

仏教は、今から約1500年前に百済から日本に伝来して以降、日本人に多くの影響を与えてきました。今日でも京都のお寺には参拝客が溢れ、御朱印集めも数年来のブームです。ただ、それだけ仏教に親近していても、「仏教はどのような教えか。」という肝心な点について語られることは殆どありません。それは、まるで商品のパッケージだけ見て説明書を読まないようなものです。そのため、本連載では仏教という商品の説明書となることを目指して記していきます。

仏伝について

仏教を知るには、何から手を付ければ良いのでしょうか。それには、まず、仏教の創始者であるお釈迦様の生涯、事績を辿ることから始めるべきです。幸いな事にお釈迦様の一代記とも言える「仏伝」と呼ばれるものが残っており、そこには仏教にとって大切なお釈迦様の御誕生、お悟り、初めてのお説教、ご入滅という四つの記念(四大事)を中心とした物語が記され、それを読むことで仏教がどのような教えなのか分かるようになっていきます。ただし、仏伝は一つだけではなく、時代を重ねるごとに次々と制作されており、中には尾ひれが付きすぎて原初形からは乖離のあるものもありますし、古くても生涯を辿るには話が中途半端なものがあったりします。そんな中で、四大事の三つが含まれるお釈迦様の誕生から祇園精舎建立までが描かれ、制作時代も古いジャータカというお経に収録される「ニダーナカタ」という仏伝が最も一貫していますので、これを基軸に話を進めたいと思います。ただ、その前にお釈迦様のお名前とお釈迦様が生きたインドという国について触れておきたいと思います。

お釈迦様の名前

日本では、「お釈迦様」、「仏様」などと呼ばれることが多いですが、これらは尊称であり、本名ではありません。本名はインドの俗語の一つであるパーリ語で「ゴータマ・シッダッタ(Gotama Siddhattha)」と伝わります。ゴータマが姓で、シッダッタが名です。もっとも、ゴータマという姓は初期の仏典にも見られますが、「シッダッタ」という名は後代に増補されたと見られる仏典で初めて登場しますので、後代に創作された名ではないかとの指摘もあります。また、ブツダという名称は元々お釈迦様の固有名詞ではなく、当時のインドでは悟った人をみんな「ブツダ(仏陀)」と呼んでいたようですが、お釈迦様が悟って「ブツダ」となって以降は、ブツダ=お釈迦様と定着しました。そして、仏教がインドから中国に伝わり、ブツダが漢訳されると、仏陀のほかに「浮図(ブド)」などと音写され、それが「ブド→ホド→ホトケ」と変化したと考えられています。これが、「ほとけ」の由来です。なお、諸橋大漢和で知られる漢字研究者の諸橋轍次氏は、仏の旧字体である「佛」は中国に仏教が伝来してから創作された漢字であり、「イ」は人、「弗」は「ならず(~ではない)」を意味するので、「佛」とは「常人を超えている」という意味だと解しました。さらに、お釈迦様は「サーキャ(釈迦)族」の出身であったことから、「お釈迦様」や聖者を表す「ムニ(牟尼)」を付けて、「釈迦牟尼」と呼ばれます。長々と、名前について記しましたが、本連載では、便宜上、悟りに至る前のお釈迦様を「シッダッタさん」、悟りに至った後のお釈迦様を「ブツダ」と区別して呼んでいきます。今回は、仏教が誕生した時代背景を解説します。

今回のまとめ

お釈迦様の名前は「ゴータマ・シッダッタ」

ブツダは元々悟った人という意味だった

仏教が中国に伝来して「佛」という漢字ができた

「ブツダ」→「ブド」→「ホド」→「ホトケ」となった

お釈迦様は釈迦族出身だから「お釈迦様」と呼ばれる